

令和 4 年 6 月 30 日現在

機関番号：34320

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H00939

研究課題名(和文) 鶴見和子の内発的発展論を「受苦と共生の社会運動論」として現代に再考する実践的研究

研究課題名(英文) Practical research for reconsidering the theory of indigenous development proposed by Tsurumi Kazuko as a social movement theory

研究代表者

杉本 星子 (Sugimoto, Seiko)

京都文教大学・総合社会学部・教授

研究者番号：70298743

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、京都文教大学の鶴見和子文庫資料のデータベース化を進めて、鶴見和子の内発的発展論構築の軌跡をたどり、とくに不知火海総合調査団での水俣調査に焦点をあてて鶴見の学問的業績を学際的に検討した。それを通して、鶴見の内発的発展論が、単なる「もう一つの近代化論」ではなく、南方熊楠や柳田国男の研究のうちに内発性を再発見した理論的研究と、水俣でのフィールド調査で出会った水俣病患者やその支持者の思想や活動のうちに内発的発展を見いだした実践的な研究のなかで育まれた、「創造的な共生社会」の構築に向けた実践的な社会運動論であることを明らかにし、鶴見の内発的発展論を戦後の近代思想史のうちに位置づけ直した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、鶴見の内発的発展論が、単なるもう一つの近代化論ではなく、水俣病患者やその支援者との出会いのなかで育まれた、「創造的な共生社会」の構築に向けた実践的な社会運動論であること、そして、水俣の漁民の伝統的な信仰と世界の諸民族のアニミズムの信仰に通底する共生の倫理を論じた鶴見の晩年のアニミズム論が、地球規模の環境問題が深刻化する現代において大きな社会的意義をもつことを明らかにして、鶴見の内発的発展論を近代思想史のうちに位置づけ直した学術的意義がある。また、鶴見和子文庫資料の公開に向けてデータベース化を進めるとともに、公開シンポジウムを通して、本研究の成果を広く社会に還元した社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This project aimed to compile a database of documents in the Kazuko Tsurumi Collection at Kyoto Bunkyo University and to promote interdisciplinary research on the "Theory of Endogenous Development" of Tsurumi Kazuko, focusing especially on her field research at Minamata. This study revealed that the encounter between her theoretical study for rediscovering the endogenous features in the work of Yanagita Kunio and Minakata Kumagusu and her experience of the fieldwork on lives and activities of sufferers of Minamata disease and their supporters led Tsurumi to develop her "Endogenous Development Theory" into a practical social movement theory for a "Creative Symbiotic Society", rather than just an "alternative modernization theory" as it is generally said. Through this study, we reconsidered and relocated "Theory of Endogenous Development" of Tsurumi Kazuko in the history of post-war modern thought.

研究分野：社会人類学

キーワード：鶴見和子 内発的発展論 水俣 共生 環境 聞き書き 石牟礼道子 オーラルヒストリー

## 1. 研究開始当初の背景

鶴見和子の「内発的発展論」の批判的継承を目指す本研究の発端は、1996年、鶴見和子が宇治市にある高齢者施設へ入居するにあたり、同施設近くに位置する京都文教大学に蔵書約5,200冊を寄付し、同大学図書館がこれを「鶴見和子文庫」として受け入れたことにある。大学創設10周年にあたる2006年の7月に鶴見和子の訃報が届き、続いて8月に遺族鶴見俊輔氏から、故人が晩年をすごした高齢者施設の部屋にあった蔵書800冊および研究ノート、カード、書簡その他約2,000点が寄贈された。資料整理のため、ただちに京都文教大学内外から研究者を募って本格的な共同研究が始められた。以来、京都文教大学人間学研究所を中心に、鶴見和子文庫を活用した共同研究が続けられてきた。鶴飼正樹を研究代表者とし、杉本、鶴見太郎、高石浩一、西川、猿山隆子が参加した科学研究費による共同研究(2008-2010年)で、鶴見和子文庫所蔵資料のデータベース化に着手し、肉筆資料も多い鶴見和子文庫未公開部分を含めた台帳が完成したことで、所蔵資料の検索が容易になった。それにより、鶴見和子文庫の全体像が浮かび上がるにつれ、さらに一次資料の詳細な調査を行うことで、鶴見の内面における哲学的深まりを捉えた鶴見和子研究を進める必要があることが認識された。

また、杉本星子と西川祐子は、鶴見和子文庫所蔵資料のデータベース化と平行して、鶴見が参画した生活記録運動に関する聞き取り調査を行った。その過程で、紡績工場の生活記録運動のリーダーであった澤井余志郎氏が、生活記録運動から離れた後も、鶴見と繋がりながら、四日市公害の被害者に寄り添い聴き書きを続けて公害訴訟の記録を残したこと、そして水俣から四日市へと問題が継承される中で公害病患者の言葉とそれを介した彼らの苦しみへの共感が、人びとを繋ぎ社会を動かしてきたことが明らかになった。そこから、鶴見が副団長として参加した不知火海総合学術調査団の水俣調査において、鶴見と水俣病被害者やその支援者がどのような関係を持ち、それが鶴見の内発的発展論にどのような影響を与えたかを、改めて検証する必要があると考えるに至った。

以上の鶴見和子文庫を活用した共同研究と並行して、京都文教大学では開学以来、大学を地域の知の拠点とすべく隣接するニュータウンでの地域連携活動にも力をいれてきた。杉本、高石、鶴飼、吉村夕里、西川は、市営住宅に入居の後、行政から放置される中国帰国者や東日本震災被災者たちそれぞれの過酷な体験を、「語る・聴く・書く・読む」という方法で言語化し記録する作業を続け、それを通して戦争被害者や震災避難者がニュータウンにおいて繋がり生きる力を得るための場づくりに参画し、また、市営住宅に住む障がい者の社会活動を支援しながら、ニュータウンの社会課題に取り組む等の実践的な共同研究を行ってきた。その中で、鶴見が提唱した、弱者をキーパーソンとする受苦と共生の内発的発展の思想が、現代社会において重要な意義をもつことに気づいた。少子高齢化、社会格差の拡大、地域間格差、多文化化が進むとともに社会が内向きに閉じ非寛容と排他性の傾向を強めている現代社会において、社会的弱者や異質な他者の包摂が可能な社会の構築に向けた社会理論が強く求められているのである。

こうした背景のもとで、鶴見和子の内発的発展論を、開発政策論や生命論としてではなく、受苦と共生の社会運動論としてとらえる本科学研究の申請に至った。

## 2. 研究の目的

鶴見の内発的発展論はこれまで、全国総合開発計画の下で国家と大企業の主導によって進められた上からの外來型地域開発に対する対抗理論として、高く評価されてきた。しかし、鶴見和子の内発的発展論に内包される、自然と人間が共生する世界を構想する生命論や、地域に生きる個人の内発的発展を基盤とした創造的な社会構築をめざす社会運動論の側面について、本格的に議論されることはほとんどなかった。

そこで、本研究では、①京都文教大学に寄贈された鶴見和子文庫の中で、鶴見の内発的発展論の原点でありながら、まだほとんど手がつけられていない不知火海総合学術調査のインタビュー記録などの一次資料のデータベース化作業を進め、②それを通して、鶴見が生涯をかけて考え続けた内発的発展論の軌跡を明らかにするなかで、③とくに、鶴見和子文庫所蔵の文献や不知火海総合学術調査団関連資料に焦点を当て、鶴見が水俣の公害病患者との出会いのなかで発想し、晩年、自らも障がいを生きるなかで深めていった、弱者をキーパーソン(萃点)とする内発的発展論を、学際的な共同研究をもって見直すことにより、④鶴見の内発的発展論を、戦後の社会思想史のうちに改めて位置付け直すとともに、⑤少子高齢化や社会格差の拡大、多数の震災被災者の発生と地域の多文化化の進行によって社会的弱者が多数化する現代社会において、具体的には本科研メンバーが参画する地域連携活動のなかで、鶴見の内発的発展論を批判的かつ実践的に継承することを目指した。

## 3. 研究の方法

研究の方法は、大きく以下の5つからなる。①京都文教大学に寄贈された鶴見和子文庫収蔵資料のデータベース化作業、②共同研究メンバーの分担テーマに基づいた個人研究、③定期的に共同研究会を実施して、基本情報を共有し、メンバーの研究報告により研究成果を共有、④公開研究会という形をとったシンポジウムの実施による研究成果の社会への還元、⑤最終年度の研究報告書の作成からなる。

具体的には、①本科研の研究分担者と鶴見和子文庫の創設時から資料整理に携わってきた研究協力者の大浦伸

子と立石尚史が、鶴見和子文庫所蔵資料のデータベース化のための具体的な方法やスケジュールを検討し、とくに鶴見の内発的発展論の原点でありながらほとんど手がつけられていない不知火海総合学術調査のインタビュー記録などの一次資料を中心に、研究分担者による資料調査と学生アルバイト等によるスキャン作業を組み合わせ、データベース化の作業を進めた。②本科研のメンバーは多彩な専門分野の研究者から構成されており、それぞれの専門に応じたテーマをもって研究分担し調査研究を行なった。鶴見の内発的発展論の思想的な再考と位置づけについては、日本近現代史・思想史の視点から加藤千香子、黒宮一太、社会学・社会人類学の視点から鶴飼正樹、杉本星子、佐藤量、民俗学の視点から鶴見太郎、小林康正、臨床心理学・地域福祉の視点から高石浩一、吉村夕里、教育学の視点から猿山隆子、仏教学の視点から平岡聡が中心となって実施し、連携研究者の西川祐子がジェンダー論の視点からサポートするというように、学際的に検討を進めた。③共同研究会は、基本的に年3回実施し、そのうちの1回を公開研究会としてのシンポジウムとして、参加者を広く募った。また、2019年には水俣合宿(2019年8月31日—9月1日)を実施し、合同調査を行なった。④科研期間を通して3回実施したシンポジウムでは、科研メンバー以外の研究者や有識者、一般市民にも議論に加わっていただき、広く社会に問題を問いかけた。⑤最終年度に総括として成果報告書をまとめ、近年中の成果出版に向けた準備をした。

#### 4. 研究の成果

①鶴見和子文庫の中でほとんど手がつけられていなかった不知火海総合学術調査のフィールドノート、インタビュー記録や水俣病被害者やその支援者との書簡等の一次資料、および調査団や水俣病裁判関連団体のガリ版刷り資料などのデータベース化作業を進めたことにより、鶴見和子文庫の一部公開に向けた具体的な準備を進めることができた。②共同研究者の各専門分野に応じたデータベース化への参画や、水俣や熊本等でのフィールド調査を通して、鶴見和子が水俣との関わりの中で、哲学的な省察を深めながら内発的発展論を練り上げていく過程が明らかになった。③共同研究会における研究報告や情報共有によって、鶴見の学問的業績を学際的に検討することにより、鶴見の内発的発展論が、南方熊楠や柳田国男の理論のうちに内発性を再発見する理論的な研究と、水俣におけるフィールド調査において水俣病被害者やその支持者の思想や活動のうちに内発的な発展を見いだしたフィールド調査での経験という実践的研究の出会いのなかで育まれた、「創造的な共生社会」の構築に向けた社会運動論であり、単なる「もう一つの近代化論」ではなと、そして、世界の諸民族のアニミズムの信仰のうちに共生の倫理が通底することを論じた鶴見の晩年のアニミズム論が、地球規模の環境問題が深刻化する現代世界の変革を目指した理論であることを明らかにして、鶴見の内発的発展論を近代思想史のうちに位置づけ直した。そして、世界の諸民族のアニミズムの信仰と水俣の漁師たちの伝統的な信仰に、「自然と人間の共生の倫理」が通底すること論じた鶴見の晩年のアニミズム論が、地球規模の環境問題が深刻化する現代において大きな社会的意義をもつことを明らかにして、鶴見の内発的発展論を戦後の近代思想史のうちに位置づけ直すことができた。④本科研究期間内に実施した3つの公開シンポジウムでは、「鶴見和子と水俣」という共通テーマを設定した。そのうえで、『水俣のポリティクスとポエティクス—鶴見和子／内発的発展論の原点に立つ』(2020年2月7日)では、水俣病被害者と部外者としての支援者や研究者の出会いをめぐって、『京都と水俣—共生(ともいき)という支援』(2021年3月3日)では、水俣病被害者と他地方、とくに京都の支援者の繋がりの中で「水俣病問題」が長期にわたり大きく展開してきたことについて、『鶴見和子と石牟礼道子—水俣から近代を問い続ける理論と詩学』(2022年1月8日)では、「聞き書き」という方法を通じた水俣病問題へのアプローチや水俣病被害者と部外者の出会いから生まれる相互の内発的発展について議論することによって、本科研研究の成果を社会に還元するとともに、鶴見の内発的発展論の今日的な意義を広く社会に発信した。⑤科研最終年度に成果報告書『鶴見和子文庫から共生の思想を問う—萃点としての水俣』を発刊し、研究成果の詳細を公表した。成果報告書は、鶴見和子文庫の概説、個人研究の成果報告、シンポジウムの基調講演という3部構成になっている。掲載された個人研究の成果報告は、以下の通りである。「鶴見和子の内発的発展論における『アニミズム』」(杉本星子)、「不知火海総合学術調査団の『水俣』—内発的発展論に注目して」(加藤千香子)、「地域という抵抗主体—『月刊 地域闘争』のなかの京都と水俣」(西川祐子)、「『理論』と『体験』が出会う場所—鶴見和子と石牟礼道子」(鶴見太郎)、「『不知火海総合学術調査団』における『ことば』の位相—『社会科学』における『聞き書き』の位置づけを中心に」(小林康正)、「水俣における社会運動と障害をめぐる言説」(吉村夕里)、「鶴見和子とエリクソン」(高石浩一)、「仏教思想から見た内発的発展論」(平岡聡)、「鶴見和子文庫から見るチツソと植民地」(佐藤量)。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 杉本星子	4. 巻 106
2. 論文標題 「ニュータウンという住空間」の組みなおしに向けて—京都南部向島ニュータウンにおける地域住民と大学連携のまちづくり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 都市住宅学	6. 最初と最後の頁 57-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒宮一太	4. 巻 改題第5号（通巻83号）
2. 論文標題 ナショナリズム不在の平成	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 98-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒宮一太	4. 巻 第 期第2号（通巻79号）
2. 論文標題 ナショナリズムの現在：「国民」の消失をいかに押しとどめるか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 94-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒宮一太	4. 巻 改題第2号（通巻80号）
2. 論文標題 グローバリズムに掻き消された「国民」の声	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村夕里	4. 巻 12
2. 論文標題 障害のある当事者が参加する災害準備活動	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本障害者リハビリテーション協会事業報告	6. 最初と最後の頁 65-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 佐藤量
2. 発表標題 満洲における学校教育と同窓会ネットワーク
3. 学会等名 アジア教育史学会第27回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤量
2. 発表標題 満洲における日本人住居と生活空間
3. 学会等名 マイグレーション研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 鶴見太郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 358
3. 書名 柳田国男	

1. 著者名 佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 370
3. 書名 戦後日本の満洲記憶	

1. 著者名 松田美枝編・吉村夕里	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 多様な私たちがともに暮らす地域 障がい者・高齢者・子ども・大学	

1. 著者名 平岡聡	4. 発行年 2019年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 247
3. 書名 浄土思想入門：古代インドから現代日本まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	平岡 聡  (Hiraoka Satoshi)  (20269749)	京都文教大学・臨床心理学部・教授   (34320)	
研究分担者	佐藤 量  (Sato Ryo)  (20587753)	立命館大学・先端総合学術研究科・非常勤講師   (34315)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加藤 千香子  (Kato Chikako)  (40202014)	横浜国立大学・教育学部・教授    (12701)	
研究分担者	高石 浩一  (Takaishi Koichi)  (40226733)	京都文教大学・臨床心理学部・教授    (34320)	
研究分担者	小林 康正  (Kobayashi Yasumasa)  (40288684)	京都文教大学・総合社会学部・教授    (34320)	
研究分担者	吉村 夕里  (Yoshimura Yuri)  (50388211)	京都文教大学・地域協働研究教育センター・研究員    (34320)	
研究分担者	鵜飼 正樹  (Ukai Masaki)  (70192507)	京都文教大学・総合社会学部・教授    (34320)	
研究分担者	鶴見 太郎  (Tsurumi Taro)  (80288696)	早稲田大学・文学学術院・教授    (32689)	
研究分担者	黒宮 一太  (Kuromiya Ichita)  (80449561)	京都文教大学・総合社会学部・准教授    (34320)	
研究分担者	猿山 隆子  (Saruyama Takako)  (90774555)	関西福祉大学・教育学部・講師    (34525)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------